テレビ朝からフリーに転身 佐々木正洋アナ

日曜日のヒーロー 813

お昼の顔である佐々木さんのマシンガントークはもはや芸の領域。あの「夕刊キャッチアップ!」を息継ぎせずに視聴していたのは私だけでしょうか…。（撮影・下田雄一）

定年まであと2年半余り。テレビ朝日の佐々木正洋アナウンサー（57）が3月末で退社した。同局「ワイド!スクランブル」（月～金曜午前11時25分）の名物コーナー「夕刊キャッチアップ!」を16年間務めた「昼の顔」は4月から、尊敬する萩本欽一（71）と同じ芸能事務所に入り新たなスタートを切った。モットーは「ウソのないしゃべり」。フリーアナウンサーという激戦区に打って出る。

不遇の10年あったから

定年前の決断

フリーアナウンサーとして、4月からふるさとでもある九州朝日放送の旅番組「笑顔まんてん　タビ好キ」に出演している。その仕事で福岡・太宰府天満宮に行った時、地元のおじさんに「あんた、ここに来て何しとっと。東京のテレビに出んと？」と声を掛けられた。「ロケに来ているんです」と言うと、「菅原道真と同じで左遷されたとか」と言われ、吹き出した。佐々木ファンというおばちゃんには「死んだかと思うとった。だってテレビに出んも」と真顔で言われた。

佐々木　行く先々で「懐かしか」って。テレビのサイクルというか、時の流れは速いと痛感しましたね。

東海大のアナウンサー講座の講師にもなった。パーティーの司会や講演依頼も相次いでいる。

佐々木　人に頭を下げるのがこんなにすがすがしいとは思わなかった。頭を下げるのが嫌という気持ちはさらさらなかったですが、これほど心底「どうか一つよろしくお願いします」と、お寺で手を合わせるのと同じぐらい真摯（しんし）な気持ちで、頭を下げたことがなかったので。逆にテレビ朝日という看板の大きさを再認識しましたね。相手はその看板に、僕はその看板を背負って頭を下げていたわけですから。

定年まで2年半を残しての決断だった。29歳で退社してフリーとなった同期の古舘伊知郎（57）と比べると28年も遅い。

佐々木　僕はあまり恵まれない時期が10年くらいありまして、フリーになるなんて自分の中ではとんでもないことだった。自分は吹けば飛ぶような存在と思っていて、テレビ朝日でアナウンサーとして司会をやれるようになったら最高と思っていたんです。

画面にコンスタントに登場するようになったのは、入社3年目、1980年(昭55)に起用された老舗ワイドショー「アフタヌーンショー」の“突撃リポーター”としてだった。当時看板の故梨元勝さんが降板し、局は後任を探していた。

佐々木　（そば店の）長寿庵でカツ丼を食べていた時、店まで電話がかかってきた。「佐々木君、芸能やらないか」って言われた。僕はエンターテインメントのね、バラエティーの方の芸能かと思ったので「ハイッ！　やります」って。あっという間に決まってしまった。

ワイドショーが高視聴率を獲得し始めた時期で、各局、専属のリポーターと契約していた。局アナのリポーターは異色だった。

佐々木　知らない家に行ってピンポンしたり、芸能人に「真相は？」なんて直撃して、嫌われたと思います（笑い）。

名前が売れ始めた85年、暴走族のやらせリンチを放送したことなどで番組が突然終了した。不遇の始まりだった。

佐々木　僕は直撃アナウンサーというイメージがありましたから、その後もバラバラと番組に出ていましたが、ということ時に、候補から外れるんです。だからフリーなんて考えられなかった。

2度退社断念

転機は96年に始まった「ワイド!スクランブル」の「夕刊キャッチアップ!」だった。夕刊の注目記事を読むコーナーで、41歳で起用された。瞬間最高16%という、昼の番組として驚くべき視聴率を獲得するようになった。05年には昼の情報番組「サンデー!スクランブル」の初代司会者に丸川珠代アナウンサー（41＝現自民党参院議員）と抜てきされた。

夕刊の行間読んで16年

佐々木　突撃リポーターなどで何千回も取材現場に出た。だから生意気なことは言えませんが、夕刊の記事の行間を感じるんです。この時、記者さんはどう思ったのだろうかとか。東日本大震災の被災者のドキュメンタリーを読んで、関係者から「お前の『読み』で泣いちゃったよ」と言われた。何とも言えない充実感がありましたね。

「昼の顔」になると、それまで思ってもいなかった「フリー」の3文字が頭をもたげた。50歳を超えた時、会社の幹部に相談した。「準定年（55歳）まで待てよ」と言われ断念した。準定年を超えた時、今度は「サンデー!」のコメンテーター、漫画家の黒鉄ヒロシ氏（66）に相談した。

佐々木　黒鉄さんに「勝算はあるのか？」と言われたんです。どんどんフリーへの思いが膨らんでいた土壇場で聞かれ、気持ちの中でグラグラしたんです（笑い）。そう言われたぐらいでグラグラするのは地に足がついていないな、と思った。2度目の未遂でしたね（笑い）。

なぜフリーになりたいのか、改めて考えた。ギャラの問題ではなかった。「しゃべりの場面で佐々木正洋という人間を認められたい」という、いちずな思いからだった。

佐々木　年々しゃべりの面白さを感じるようになった。例えば披露宴の司会をすると「しょせん、アルバイトだろう」って言われますが、僕にとってはしゃべりの真剣勝負なんです。一世一代の新郎新婦をどう盛り上げるか。配慮ある言葉、気遣いある言葉、核心を突く言葉とか、話術の面白さをたまらなく感じるようになった。テレビ局の枠にとらわれず、しゃべりを生かせる仕事なら何でもやりたいと思った。「言葉のムーブメンター」でありたいんです。子供も独立しましたから、座台を引いてもカミさんを食わせる責任ぐらいは果たせるだろうと思ったら、気が楽になって決断したんです。

欽ちゃん憧れ

4月に萩本欽一ら多数のタレントが所属する大手芸能事務所「浅井企画」に入った。欽ちゃんは子供のころから大好きで、テレビマンになると視聴率男として尊敬した。ある時、欽ちゃんが「ワイド!」にゲストコメンテーターとして出演した。司会者が中国との領有権で揺れる尖閣諸島問題についてコメントを求めた。

佐々木　何て答えるだろうと思った。失礼な言い方ですが、萩本さんに対しては違和感を覚える質問でしたから。萩本さんは独特の口調で「仲良くしようよ!」と言ったんです。まさに、その通りなんです。一言で核心を突く。すごいと感動しました。

退社を決めた後、番組制作会社の古い友人から「浅井企画なら紹介できるよ」と言われた。「欽ちゃんと一緒に仕事をしたい」と、迷わず紹介を頼りに門をたたいた。欽ちゃんからは「それなら応援しないとね」の言葉をもらった。

テレビ朝日での仕事は楽しかった。神奈川・緑持寺から生中継する故石原裕次郎さんの十三回忌特別番組（99年）の司会を担当した際、2倍に膨らむほどメモやデータを書き込み完ぺきに準備した台本をなくし、青くなったこともあった。数々の女性アナウンサーとも仕事をした。訃報が飛び込み「ただ今、ト報が入ってきました」と読んだり、「旧中山道を歩いて」を「1日中、山道を歩いて」と間違う女性アナもいた。アナウンス部長（待遇）も経験した佐々木にとっては苦笑いの連続だった。

今の思いは「番組呼んで」

佐々木　僕も人のことは言えません。「体中の血が煮えたぎって」を「皿が煮えたぎって」と言ったり、「適度な温浴は体にいい」を「適度な混浴は…」と言ったり。でもアナウンサーは楽しい仕事です。

フリーアナは男も女も激戦区。看板に守られた局アナから、真の実力が問われる第2の人生が始まった。

佐々木　みのもんたさんや徳光和夫さん、羽鳥慎一さんは都会的センスがあるじゃないですか。僕は結構涙もろいし、義理とか人情を大事にしたい。欲を言えば、西川きよしさんとみのさんの間くらいの感覚で、九州男児ならではのカントリー精神を持ち続けたい。演歌番組の司会をするのが夢です。最終的にテレビ東京さんの「年忘れにっぽんの歌」の司会をしたい。司会の徳光さんがどれほどうらやましいか（笑い）。

「佐々木さんはテレビ朝日の匂いがする」と言われるといろ。うれしいことだが、いかに早く脱却するかが課題といろ。最後に紙面を通じて自己アピールをどうぞ、と言うと…。

佐々木　まずは「番組に出してみて」と言いたい。それが一番手っ取り早い。決して後悔させません。ギャラ的にも今がサービス期間中。あっという間に高くなるかも知れません。昔ながらの人間だから今起用してくれたら一生忘れません！（言いたい放題ですねえ（笑い））。

速射砲のような弁舌は、ウソのない誠実さとやる気でいっぱいだった。

次回は桂三枝

【取材・笹森文彦　レイアウト・佐藤善也】

◆佐々木正洋（ささき・まさひろ）1954年（昭29）7月17日、福岡県生まれ。77年に慶大法学部政治学科卒業後、テレビ朝日入社。大学時代は落語研究会に所属。「アフタヌーンショー」「モーニングショー」「スーパーJチャンネル」「サンデー!スクランブル」などで司会や実況、リポーターを歴任。自著に「ちょっとしたコツで誰でも『上手な話し方』が身につく」（実業之日本社）。夫人は元フジテレビアナウンサーの万紀子さん（55＝旧姓古賀）。柔道初段。趣味はマージャン、旅。174㌢、70㌔。血液型B。

「キャッチアップ!」はメーンディッシュです

「ワイド!スクランブル」のコメンテーターを務め、作家で作詞家のなかにしれ氏（73＝写真）「夕刊キャッチアップ!」は番組の白眉、メーンディッシュになっていた。アイデアだけでなく、話芸の力だと思う。サラリーマンのアナウンサーに収まらないキャラクターや存在感のある人。フリーには遅いというけど、「夕刊」をやってフリーのムードを漂わせていた。フリーになられた方の苦労ではなく、活躍している先輩の成功例を研究してほしい。特に（日本テレビからフリーになった）徳光和夫さんの語り口調、価値観、自分のさらけ出し方、どう視聴者と心を1つにするのか、などを学んでほしい。